Zennoji Temple
Kandachigaike
Shirahige shrine
脚折雨乞
国選択無形民俗文化財・鶴ヶ島市指定無形民俗文化財
すねおりあまごい
脚折雨乞

脚折雨乞

4年に一度行われる、江戸時代から続く降雨祈願の伝統行事で、雨を呼ぶために孟宗竹と麦わらで巨大な龍蛇(りゅうだ)を製作することが特徴です。龍蛇は板倉雷電神社(いたくらいでんじんじゃ)から持ち帰った御神水で行う入魂の儀によって龍神(りゅうじん)となり、約300人に担がれて、白鬚神社(しらひげじんじゃ)から雷電池(かんだちがいけ)までの約2kmを練り歩きます。池での雨乞いの後、最後に一斉に解体することで、龍神の魂は天へと昇ります。

伝 承

明治時代の記録によると、「雷電池のほとりの社に雨乞いをすると必ず雨が降ったものの、寛永の頃(1624-1644)、新田開発に伴い池を縮小したところ、棲(す)んでいた大蛇が上州板倉(現群馬県板倉町)へ移り棲み、雨が降らなくなってしまった。そこで、群馬県の板倉雷電神社から池の水を持ち帰ると、見事に雨が降り始めた。」と伝えられています。
(明治8年頃『村誌編輯(そんしへんしゅう)』)

地元住民のちから

昭和39年(1964)、脚折雨乞は行事の担い手である専業農家の減少などの影響で一度途絶えてしまいます。昭和50年(1975)、雨乞いの持つ地域の一体感を再認識した地元脚折地区住民が、「脚折雨乞行事保存会」を結成、翌昭和51年(1976)に脚折雨乞を復活させました。その後は4年に一度行われるようになり、現在に至ります。

「脚折雨乞行事保存会」では、龍蛇の骨格の組み方、目や鼻などの竹細工をはじめとする龍蛇製作に関する技術の習得を目的とした講習会による「技」の伝承や、子ども達が担ぐ「ミニ龍蛇」の製作といった後継者育成にも力を注いでいます。地域住民が一体となって江戸時代からの伝統を未来へつないでいます。

龍蛇製作から昇天までの流れ

1.雨乞い1週間前、竹で全体の骨格を作る

2.骨格完成後、麦わらで肉付けを行う

3.雨乞い当日の朝、熊笹で飾り付け

4.龍神渡御（とぎょ）
白鬚神社→雷電池の2㎞を練り歩く

5.雷電池到着、池での雨乞い
「雨降れたんじゃく、ここに懸かれ黒雲」
と叫びながら降雨祈願

6.解体＝昇天
縁起物とされる頭部の金色の宝珠（ほうじゅ）を
奪い合う

脚折雨乞データ

保存会：脚折雨乞行事保存会

市指定：無形文化財
昭和 51 年 (1976)8 月 1 日 指定

国選択：無形民俗文化財
平成 17 年 (2005)2 月 21 日 登録

備　考：平成25年(2013)ふるさとイベント大賞で
大賞（総務大臣表彰）受賞

龍蛇データ

全　　長：36m	鼻の穴 (直径)：0.18m
直　　径：6m	角 の 全 長：4m
重　　量：約 3 t	宝 珠 の 玉：0.45m
頭 の 全 高：4.5m	尾の剣の全長：1.05m
頭 の 全 幅：2m	開いた口の直径：1.6m
目玉 (直径)：0.25m	

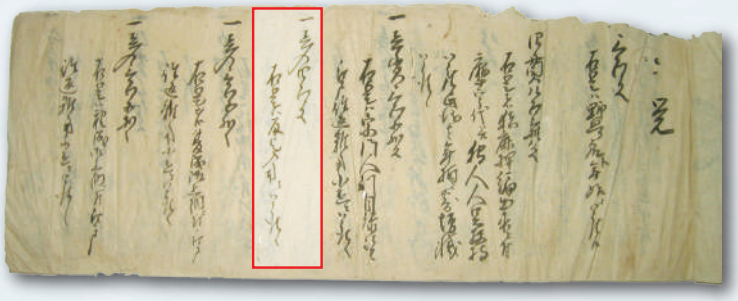
脚折雨乞の詳細はこちら▶

文献史料から見る脚折雨乞

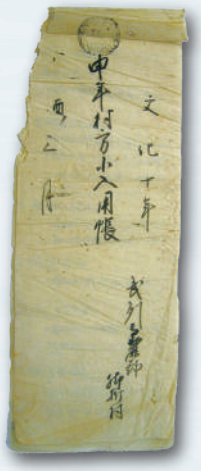
脚折村の雨乞いに関する最も古い史料は江戸時代の文化10年（1813）に記された「申年村方小入用帳（さるどしむらかたこにゅうようちょう）」で、その中に「一貫四百文　右是ハ雨乞入用ニ御座候」と出てくるのが初見となります。その後、弘化5年（1848）、文久2年（1862）と雨乞いの経緯に関する記述が出てきます。

現代の脚折雨乞に近い姿を記録しているのは、明治10年（1877）の名主田中佐平太の日記です。「…雨乞に村中一同鎮守へ集まり板倉御水十時頃来る午後雷電社へ行き蛇を池中に入れ祈る」とあり、初めて「蛇」が文献に登場します。

（いずれも田中家文書）



「右是ハ雨乞入用ニ御座候」と書かれており、文化9年に雨乞いが行われたことがわかります。



会場・渡御案内図

※渡御ルートおよび雷電池児童公園周辺は、ドローンの使用が禁止されています。

問合せ先 ● 鶴ヶ島市教育委員会　生涯学習スポーツ課　文化財担当　TEL.049(285)2194